

1. また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上にはすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。
2. 地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」
3. それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。
4. この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手を持っていた。
5. その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。
6. そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

説教

8月には、アメリカが広島長崎に原爆が落とした日があり、日本の敗戦記念日もあって、戦争と平和について考えさせられる時です。

昨日の新聞を見ると、集団的自衛権のことが問題となっています。日本がアメリカに追随して戦争をする体制が、着々と進んでいます。同時に、原発の再稼働と海外輸出の問題が大きくなって来ています。「原爆と原発は別問題」という主張があり、広島市長もそう主張するようになってしまいましたが、それはもともと「原子力の平和利用」なる幻想で日本国民を長年散々惑わしてきた原発推進の論理でした。戦争の兵器である原爆と原発の問題は同じです。平和を乱す悪しき力がどのようなものであり、私たちキリスト者はそれをどのように理解して、どう戦ったらいいのかを共に黙示録から学びましょう。

黙示録 17章と 18章は、「大バビロン」なる「大淫婦」について使徒ヨハネが記す場面です。17章では「大淫婦」の姿を記し、18章では「大淫婦」がどう神にさばかれたかが記されます。

それによると、「大淫婦」は、高貴で華やかな「紫と緋の衣」を纏い、「金と宝石と真珠」とで身を飾って、外見は華やかです。しかし「大淫婦」は、「神を汚す名で満ちた」緋色の獣にまたがり、あらゆる汚れに満ちた金の杯を手を持って、「聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている」のでした。こうして、「大淫婦」は、外見上は華やかな衣を纏いながら、その内実は神に反逆し、神に仕える聖徒たちを血祭りに上げて、その血に酔いしれるのでした。世界を股にかけて、「大淫婦」は神への冒瀆と不品行の猛毒とを撒き散らします。

18章2～3節を見ると、その感化力は計り知れず、「地上の王たちは、彼女と不品行を行ない、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によって富を得た」のでした。神が造られたこの世界を破壊し、人間を惑わして狂わせます。神に愛されていることを知って神に感謝し、神と人を愛して生きるようにと、神は人をこの世に造られました。それなのに、悪魔は「大淫婦」を通して世界中の人々を惑わし、神に敵対させて、真理を証しする預言者を殺させたのです。

「大淫婦」とは、「地上の王たちを支配する大きな都のこと」です(17:18)。ヨハネの生きていた時代なら、ドミティアヌス帝の支配するローマ帝国となるし、現代なら、神に敵対している人間中心の文明社会となるでしょう。一見華やかで煌びやかに見えても、その正体は、神に敵対し、人を蔑ろにする、「あらゆる汚れた霊どもの

巢くつ」に他なりません。それは一言で総括するならば、神中心とは全く正反対の、人間中心の、傲慢な「欲」社会です。

原発の再稼働と戦争の問題とは、決して別の問題ではありません。日本が現在、戦争をする体制を着々と築いているのも、脱原発をしないのも、その原因は、要するに、一部の人間、黙示録で言えば「王たち」と呼ばれる権力者と「地上の商人たち」と呼ばれる「死の商人」の利益のためです。

あれほどの大事故が起きたのに、どうして日本が脱原発できないのでしょうか。その理由は、国内の政治的要因、経済的要因、さらには対米関係という三つの面から考えなければなりません。

「国内の政治的要因」というのは、核武装は差し控えるも、その気になればいつでも核兵器を作り出すことができるという潜在的な核保有国となることで、国際的な威信を保とうとする政策のことです。マンハッタン計画により地球上に核兵器が出現し、戦後は米英ソがそれを独占するという体制が生じますが、それは核兵器を保有することが大国の条件となるという新たな国際政治情勢を生み出します。

1958年、原子力発電に踏み出したのは当時の総理大臣岸信介ですが、彼は、民主党の幹事長時代に訪米した際、「安保改定に触れたところ、ダレスから『日本にそんな力があるかね』と、かんで吐き捨てるように一蹴された」屈辱を味わいます。それがトラウマとなって、核開発こそが大国の条件であり、国際社会で発言権を得る必須の手段であると考えられるようになるのでした。「原子力技術はそれ自体平和利用も兵器としての使用も共に可能である。どちらに用いるかは政策であり国家意志の問題である。日本は国家・国民の意志として原子力を兵器として利用しないことを決めているので、平和利用一本槍であるが、平和利用にせよその技術が進歩するにつれて、兵器としての可能性は自動的に高まってくる。日本は核兵器を持たないが、（核兵器保有の）潜在的 가능성을高めることによって、軍縮や核実験禁止問題などについて、国際の場に於ける発言力を高めることが出来る。」（『岸信介 回顧録』）こうして、原発政策は、エネルギーの需要に対処するためというよりは、むしろ日本が核の技術を習得することで、いつでも核兵器を生産できる能力を持つという、潜在的な核保有国となることが第一の目的でした。核開発は大国化の条件であり、国際社会に発言権を得る必須の条件だと思われたのです。

このように、潜在的な核保有ということが、今日に至るまで、一貫して日本の原子力政策の根底を流れています。その結果、日本はいくつもの原発を稼働させることで、原爆の材料となるプルトニウムを作り続け、2011年の段階で、核兵器 1,250 発分に相当する 10 トンのプルトニウムを貯め込んでいます（2004 年で 40 トン～5,000 発という本もある）。これは米露英仏に次いで世界第五番目で、アジアでは断トツです。日本はプルトニウム大国なのです。そして、この潜在的な核保有という原子力政策の故に、あれほどの事故があったにもかかわらず、原発の稼働をやめることができないでいるのです。

こうした政治的な事情に加えて、原発問題を考える上で無視できないのは、経済的な側面です。

あれほどの事故が起きながら、なかなか原発が無くならない背景には、「死の商人 (Merchants of death)」と呼ばれる人たちの存在があります。「死の商人」とは、要するに、戦争によって金儲けをしている人たちのことです。これについては昨年のお話ししたので、ここでは詳述を避けますが、今日に於いては、単に軍需資本家だけを意味するのではなく、財閥、官僚、政治家という、国家の政治権力と結びついた独占資本全体が「死の商人」となっています。

「死の商人」には国籍も倫理も仁義もありません。彼らは世界にまたがってできるだけ多くの利潤、すなわち最大限の利潤を獲得しようとし、戦争なしには最大限の利潤を確保できないため、戦争を起こすよう働きかけます。国内外の政府高官と政治家を買収し、軍事費を増やすよう、虚偽の情報を撒き散らして戦争の不安を煽り立て、国内外の新聞マスコミを支配することで世論に影響を与えます。こうして戦争を経る度に、「死の商人」は巨大化し、資本を独占していきます。彼らの関心は祖国が敵国に勝つことではなく、たとえ自国がやられても自分が儲けるといふ一点に集中しています。そして、アイゼンハワー大統領の原発普及政策で日本に導入された

原子力産業は、戦争と並んで巨大な利益を財閥にもたらしました。国策で保護された原発産業は、「死の商人」にとっては、ボロ儲けの「現代最大の産業」となっているのです。

脱原発を阻む三つ目の要因は、アメリカの外圧という大きな障壁です。それは、軍事利用と民事利用の両面にまたがる「日米原子力（核）同盟」のことです。これは日米同盟の最重要な政策の一環で、核兵器およびその迎撃兵器をめぐる日米間の同盟関係を指します。同時に、一方で、核エネルギー技術の民事利用（非軍事利用）についても密接な日米関係が構築されてきました。それは、要するに、商業用電子原子炉に於いて、日本がアメリカの「原子力の傘」（民事利用に於ける技術的・産業的な支配の及ぶ領域）に入ると共に、核燃料サイクルに於いて、あらゆる種類の機微核技術（SNT～ウラン濃縮、核燃料再処理、高速増殖炉）の開発を進めることをアメリカに容認してもらう体制を意味します。

日米の原子力メーカーは密接に相互依存関係を結んでいて、設計面ではおもにアメリカが担当し、製造面ではアメリカのメーカーは日本のメーカーに強く依存しています。このため、もし日本で脱原発が進行すれば、日本のメーカーは原子力から撤退します。そうすると、アメリカのメーカーは単独で原子炉を製造する能力を失っているため、重大な打撃を受けます。アメリカの原子力ビジネスそのものが不可能となるのです。国内の原子力ビジネスのみならず、100兆円ビジネスと言われる海外展開も不可能となります。アメリカの原子力ビジネスにとって、「日米原子力同盟」はまさに生命線となっているのです。このように、日本の脱原発はそのままアメリカの脱原発に波及する可能性が高くなります。アメリカにとっては、日本の脱原発は何としても避けなければならないところなのです。このため、日本が脱原発政策に踏み出す時には、アメリカがそれを阻止する強力な政治的介入をしていくことが考えられます。

以上、これまで見てきた三つの要因が脱原発の障壁となっています。それは、言い換えるならば、日本の民族エゴと、大資本家のエゴと、アメリカのエゴと言うことができます。要するに、あれほどの酷い事故が起き、これからもっと酷い事故が日本全国で起きるかも知れないという、極めて危険な状況にありながら、それでも脱原発できない理由は、日本とアメリカと大資本家のエゴにあるのです。

それはまさに、ただ自分の欲の実現のために振る舞う「大淫婦」の一つの姿です。「大淫婦」は、世界を股にかけて、やりたい放題ひたすら自分の欲と利益を追求しながら、それを咎める一切の預言者を抹殺します。そして、私たち貧しい国民はその犠牲となります。「大淫婦」が最大利潤を得るというただその悪しき目的のために、彼らが起こす戦争の犠牲となり、原発事故の犠牲となって、寿命を縮め、いのちを落とします。この「大淫婦」バビロンに、18章で厳しい神の審判が下ります。

欲の追求は「大淫婦」バビロンに於ける悪魔的な原理でした。私たちは、普段、「欲の追求」といっても罪悪感を感じません。でも、自分の欲を何より優先して追求する者は、他人を犠牲することを何とも思いません。そして、それを極限まで実現したのが「大淫婦」バビロンです。最後は神の怒りを受けて滅びます。

これに対し、神の国はこれと真っ向から対決します。神の国の原理は、罪人である人間の「欲の実現」ではなく、神のみこころの実現にあるのです。神の愛に感謝しながら、神と人を愛します。これこそ永遠に続く神の国の原理なのです。

自分勝手に、欲の赴くまま振る舞う大淫婦・大バビロンに対して、神のさばきは必ず下ります。それで、「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。」(18:4)とあるように、まずは最低限、キリスト教会は、大バビロンの罪に関わらない、大バビロンの罪から離れなければなりません。そして、次には、「こんなことをしていたら滅びる」と、警告しなければなりません。そうして、さらには、大バビロンの悪魔的な原理に対して、神の国はこうだ、罪を悔い改めよ、これまでのあり方を全面的に悔い改めて、神と人を愛せよと、世のあらゆる分野で、そしてあらゆる方法で、教え、教え続けて、とにかく声を上げ続けなければなりません。暗黒の世に、いのちある限り、神の栄光を力いっぱいにあらわすお互いとな

りたいと願います。

この戦いは困難を極めます。最悪、私たちの努力が全く功を奏することなく、日本は破滅し、私たちもいのちを落とすかも知れません。それでも、破滅した後、復興すれば、その復興後の指針となるよう、私たちは正しく生きなければなりません。たとえ一世を風靡して人々から称賛されても、時代が変われば「戦犯」ということもあり得るのです。歴史の審判に耐えうる働きを全うするお互いとなりたい、そう心から願います。